

武藤守一先生学葬

追悼のことば

名誉総長 末川博

武藤君の遺影を仰ぎみて、武藤君がいまわれわれとまったく幽明境を異にするところとなつたとは、実は私には実感としてこないのであります。あの強靱な精神と、あの頑健といつていいような身体をもつておつた武藤君が、わずかの間にこの世を去つてしまつたと、私には本當の気がしないのであります。

現に、ちょうどひと月まえ、九月六日に武藤君の還暦を祝う会を私どもしましたんです。その席で私は、ああもう武藤君も六十一歳になつたかな、というたのであります。しかし、同君がいろんな仕事をした關係からいうと、まだ六十一歳じゃつたかなあと、還暦にあたつて「もう」といつたり、「まだ」といつたりした、そういうような記憶があります。いずれにしましても、それからわずか二週間後に病魔におそわれ、そしてわずか十日の間にこの世を去つてしまつた。私にはまったく夢としか思えません。しかし、現実には現実であります。

立命館という名称が、ご存知のように、孟子の尽心篇にある『よふしちゆうたか 夭寿ちゆうたか 式しき せず、身を修めて以て之を俟つ命を立つる所以である』と、若くして死ぬることもある、長生きをすることもある、それは如何ともしがたい。夭寿ちゆうたか 式しき せずである。しかし生きておる間、身を修めてこれをまつ、そこに立命があるんだと、命を立つるゆえんがあるんだというのが、立命館の由来するところでありませう。

追悼のことば（末川）

一三三（七六七）

まさに私は、妖寿うたがわず、まったく老少不定というか、無情を感じざるを得ないのであります。

ところで、武藤君がこれまで学園のために、あるいは社会のために、いろいろと力を尽くされたことについては、ただいま多くの方々の弔辞にも明らかであります。いま私はそれを、いちいち述べる必要はないと考えております。ただ、武藤君が人間として、その性格なり人となりにおいて、私が感心しているところがある。そういう点について、いわばエピソードめいた形であります。若干のことを語ってみたいと思います。

まず第一に、武藤君は非常に落着いて冷静にものごとを判断し、また正しく論理を構成し、人とおだやかに話をするという極めて冷徹といつてよい面をもつておりました。いろいろとそれについて、私は語ることをもつておりますが、最近のこととしては昨年の二月、まだ私が総長であつて紛争がやかましく、しかも入学試験をさまざまに粉砕するという一部の諸君の動きがある。どうしても私どもは入学試験をやらにゃいかん、しかし私どもとしては機動隊の力はからないう固い決心はしておる。ところが、日時ははっきりおぼえていませんけれども、どうも犯罪捜査の名目で機動隊が入ってくるという機運があるらしく伝えられたので、それで私は武藤君と一緒に府警の本部に行つて、柏原本部長と話をしたんです。

われわれは教育的な見地から絶対に機動隊を学内に入れては困ると思つてゐるんです。ところが本部長は、それはあなたがたの方のことで、私の方は治安という立場から考えるのだというふうなことで、食い違つてまゝりません。その時に私は、武藤君も本部長も非常に明晰な頭をもつておつて互にゆづらないのに私は感心しておつたんですが、と同時に本部長に対して武藤君が、あせらずにゆっくりと、しかも理論をつめて話をする態度、私は私自身くちばしをさしはさみましたけれども、しかし同君がいかに冷静にものを判断し、また精密な論理を

もっておるかということ、私はそばから感心しておったことがあります。

しかしですね、人間はそういう冷厳なというか冷静なというか、そういう頭脳のもち主、そういう人柄だと、ともすれば人情に薄いというか、人間味を欠くというか、そういうきらいがあります。ところが武藤君はそうではなくって、人間味が豊かというか、愛情がたっぷりあるというか、とに角私はそのことをずっと知っておる。

ことに、武藤君がまだ四十歳にならぬころに学生部長をしてもらったことがある。そしてやはり、ちょうど二十年前になりますけれども、その当ても学生運動が今日とは若干意味が違いますが、かなり激烈なところがありました。そして、全学協議会というのを立命館で全国のどの大学にも先がけて、われわれと学生諸君が話し合うという場をもった。そういうところに出てくる連中は、そうとうあばれんぼうというか、やんちゃというか、そういう諸君がかなり沢山いました。それをですね、武藤君は決して憎まずによく世話をしました。校友会の大金をもって逃げたというような事件もあって、私どもは実に弱ったこともあるんです。それを、いかにも愛情にみちた格好で学生諸君に対して処理してくれました。そのことをいまだに、当時卒業した諸君が年々あつまってですよ、武藤君や私をまねいて宴をはって、そして、その当時の学園の状況なり、自分たちのやったことを語りあうという非常になごやかな会が、年々行なわれております。

実は三ヶ月くらい前にもその会があって、武藤君も私も出て、その当時の学生、不惑という四十歳になって、それぞれ立派に仕事をしておる諸君と語りあったことがある。そういう面を見て、武藤君が人間として愛情と理解としかも信頼をもたれておったという、愛情と理解と信頼、そういうものに生きることがやってきた人だというように私はみて、武藤君に敬慕の念を抱いておる次第です。

そしてもう一点、武藤君はある場合には不敵であるという程大胆であります。ど根性がすわっとる、芯がある、びくともしない強いところがありました。一面では非常に心がこまやかで細心であるが、他面においてはおそろしく大胆であつて、あるいは大胆不敵といつてもいい程のところがあります。それを私は幾度かみております。これは学生諸君との話合ひの場でも決してビクともしません。

私が、もっとも武藤君の大胆なところを知つたのは、ちょうど先にいひました戦後まだ間もないころ、おそらく昭和二十四年ごろだつたかと思ひますが、東京へ、あるスポーツ部の連中が行きました。そのひとりがピストルをもつておつた。ピストルをかくして持つておつたということが警察に知れまして、えらいことになっておる。それを武藤君が責任者として引率しておつたのだから、これは大変なことになつたといふので、東京でうちの卒業生で代議士をしとるのなどが心配しとつた。こんなことがおおやけになつたら、凶器とか銃砲所持といふ罪に問われ、大変なことになるといふのでありました。それで武藤君は、そのピストルをもつておる学生をつれて警察へ行つたんです。その時に卒業生であるところの代議士もついで行つたんです。ところが武藤君はちよつとも顔色ひとつ変えない。

あれ程の大事件である、どうも武藤という先生は度胆の大きい人ですなあというて、その代議士から私に報告しておりました。ありや珍しい人だと、あんなときに顔色ひとつ変えておらんというてですね。うまく処理してきたんですが、そういうこともありました。

いったいどうしてそんなかと、私は、それとはなしに武藤君に聞いたことがあります。武藤君は、先程どなたかの弔辞にもありましたように、戦争中、中国へ二度ばかり行つたんです。ところが、それは将校とか幹部で

なくって、兵卒として行ったというんです。兵卒として行って帰ってきた、兵卒としていろいろな苦労をなめてきておる。そして戦友が死んだりしたなかで自分は生きのこってきたんだと、だからあのことを思えば、そして生きて帰ったことを思えば、だいたいのはべつに恐ろしいことはありません、というようなことをいうておった。なるほどなあと、私は思ったことがあります。

こんなことを話しておれば、私の思い出はつきません。同君がいま、忽然としてわれわれの前から姿を消し、あの、いま聴いたような声を聞かしてくれなくなったということは、実に痛惜にたえないところである。しかし、現実はいかんともすべからず、であります。

武藤君にわれわれが期待し、またこれからやってもらえるであろうと、もらねばならんと考えておったことは、社会的にいつても、また学園においても、まことに沢山あります。それを果さないで、疾寿うたがわず、というようなことで、私よりも十八歳も若いのに先に死んでしまったということは、なんといつていいか、かなしくもあり、さみしくもあり、おしくもある次第であります。

同君を追憶することは、これは皆さんと同じであります。また、同君がこんなに急に、自他ともに許しておったあの健康をどうしたのか失ってしまったということ、これは皆さんも夢かとおどろいておられることと思いません。なんといひましても、私にとつても、同君が私のあとを引きついで、これからいよいよ本格的な仕事をしてくれると、こい希つておったところに、こういうことになりました、残念でたまりません。

これをもって、つぎることのない私のお話の一端をおわらせていただきます。

昭和四十五年十月七日

(立命館学園広報一九七〇・一〇から転載)

追悼のことは(末川)

一三七(七七二)